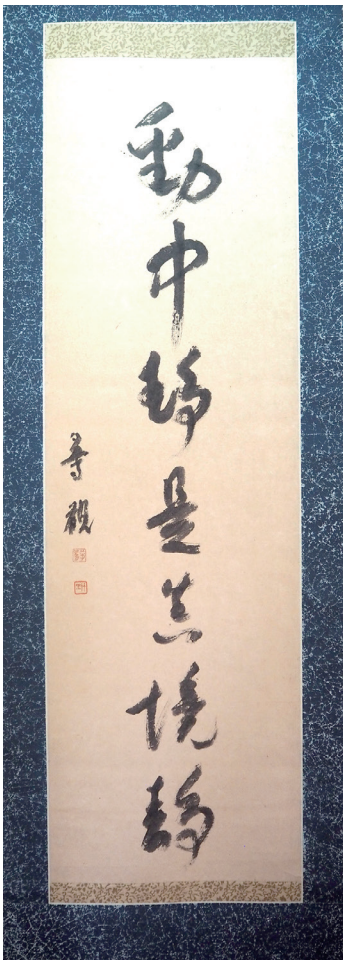
チベット・セラ寺院での多田等観
（1910年代前半頃。多田明子氏提供）

動中静是真境静
どうちゅうのせいこれしんきょうのせい



令和元年９月１日
第　４５　号
発行　梅花流師範・詠範の会
会長本間雅憲
題字　初代会長・故加藤信三師
編集者（広報部）近藤俊彦
印刷所（資）由利印刷

梅花流師範・詠範の会事務局
太寧寺（大仙市協和）伊藤道人
TEL 018-896-2029

梅の花～其の弐

秋田県梅花流師範・詠範の会 会長　本間雅憲

新元号「令和」がスタートしました。令和を考案したとされる国文学者の中西進先生が、日本各地で講演されているそうです。その中で令和の意味を説明し、聖徳太子の十七条憲法における「和を以って貴しとなす」に繋がるものだとし、十七条憲法を尊重してほしいと話されているそうです。

また、「令和」が万葉集の梅花の歌の序文を典拠としていることに関連し、「春になるとまず咲くのは梅の花。その力で四季がめぐる」とした曹洞宗の道元禅師を紹介し、「この断言のりりしさに私はやられた」と述べておられます。

道元禅師の『正法眼蔵』にある「眼睛（がんぜい）」の巻のことと思われます。その中に、―「雪裡梅花只一枝（せつりのばいかただいっし）」なる眼睛あり。はるにさきだちて、はるのこころを漏泄（ろうせつ）するなり―、とあります。

※眼睛は、瞳・目玉の意
※漏泄は、漏洩（ろうえい）と同義で、漏れること

新元号「令和」が梅花に関わりのある言葉であったこと、また、それを考案したとされる中西進先生が道元禅師を紹介し、その言葉に感動したことを全国各地の講演会で述べられていること、「梅花流」の名称の有難さ、誇らしさを改めて感じています。

令和元年度梅花流秋田県奉詠大会が、男鹿市民文化会館を会場に開催されます。近隣の寺院・寺族の皆様、檀信徒講員の皆様には、何かとお世話になることかと思います。よろしくお願い致します。また、県内の講員の皆様には、一人でも多くのご参加をお待ちしております。

特派巡回報告

平成三十一年四月、県内歴代十三人目の特派師範として、清水道広師範が本庁より任命されました。この度、記念すべき初の特派巡回を終えてご本人よりフレッシュな感想を寄稿いただきました。どうぞご覧ください！

見聞と見識 ～新任特派巡回を終えて～

北秋田市・正法院（しょうぼういん）住職　清水（しみず）道広（どうこう）

私：秋田から水原（みずはら）まで下さい。新発田までは新幹線で、そこからは在来線です。

職員：はい、水原（みずはら）ですね。……、お客様、水原（みずはら）という駅はございませんが。

私：いえいえ、在るはずですよ。この駅です。

五月三十一日からの新潟県巡回の為、秋田駅に切符を買いに行った際の一幕。自動券売機で水原（みずはら）を探しても見つからず、有人券売所へ向かってからのやり取り。しかし職員さんも見つける事が出来ず、水原（みずはら）の字を見せて切符を購入した。五月三十一日朝、お寺に暫しの別れを告げて、私は車上の人となった。そういえば電車に乗るのは何年ぶりか、そんな事を考えながらの旅。到着したら、そこからどんな事が待ち受けているのか、考えればそれだけで緊張に襲われる。せめて気を逸らそうと、購入したての小説を開くが中々集中出来ない。

清水道広特派師範

新幹線から在来線を二本乗り継ぎ、私は水原（みずはら）の駅に着いた。お迎えに来てくださった方丈様にご挨拶し、そこで……、「みずはら」ではなく「すいばら」である事を知った。なるほど、いくら秋田駅で探しても見つからないわけだ。

初めての特派巡回で、見聞が広がることに感謝し、また多くの見識の必要性を感じた。確かに秋田を巡回された先生の話題の豊富さと話力には魅了された。豊富な見聞と見識が人間の幅を広げるのだと思った。

講習風景

さて、講習を重ねるうちに口癖が出来た。それは、「梅花流の講習は楽しくなければいけません！笑顔で楽しみましょう！」である。何事も楽しくなければ続かない。楽しければ、また次の講習会にも参加してくださる。巡回中に自分の中で生まれた気付きであり、これもまた見識なのだろう。

見聞とは経験で生まれる。経験を重ねることで気付きを得て、新しい見識を身に付ける。今年四月、梅花流特派師範を拝命し、新潟と神奈川の巡回を終えた。新潟は初めて行く街ばかり。神奈川では歴史と文化に触れた。新しい土地で新しい出会いがあり、その土地を知り見聞を広げ、そこで交わされる会話の中でまた新たな見識を得る。毎日の講習会の中で、経験と共に見識はより深まっていく。見聞と見識。特派師範として、先ずはこの二つに着目し、何よりも参加される講員さんが楽しんでくれる講習を務めることを大切にしていきたいと思う。

皆さま、新米特派師範をどうぞよろしくお願い申し上げます。

無事講習を終えて（神奈川県小田原市・岩泉寺様にて）

梅花流特派講習会に参加して

令和元年六月十日から六月十五日にかけて、今年も県内十六教場にて梅花流特派講習会が開催されました。その中で、六月十三日の第三教区・由利本荘市西目町・円通寺が教場の回に参加された、大場ミエ子さんより感想をお寄せいただきました。
講師は、島根県・明元寺住職・森山祐光特派師範です。楽しく充実した講習の様子が伝わってきますね～♪

由利本荘市・大蔵寺梅花講員　大場　ミエ子

「大きく、大きく、みじん切り！」
「エーッサ、エーッサ、エッサホイサッサ♪」
歌いながら、本堂の畳を、丸い和尚さんがハーハー飛んで跳ねて。

森山祐光特派師範

お料理のお勉強を？
おさるのかごやのお唄を？
島根県から足をお運びくださった先生と、お昼は仲間と持ち寄ったお弁当。愉しい一日でした。
静岡県のお寺さんで生まれた梅花流詠讃歌と同じ昭和二十五年生まれで、六十過ぎて習い初め。八年目。未だ紫の房を愛おしく持ち歩く私は、梅の花にいつか何かを語りかけてもらえる日まで寄り添ってみようと、いつでも初心の講員です。

皆真剣に聴き入っています

梅は、厳寒を越えて
梅は、めでたく
梅は、春の希望で
梅花のふるさとには、「青い目の人形」「しゃぼん玉」「赤い靴」の野口雨情の名も見つけ、童謡の世界にほっこりと心抱かれる温もりも覚え、詠讃歌の生まれた風景に、優れた人格者だったと讃えられた音楽の専門家がいらした話など。きっと、梅の花は高貴な香りを届けてくれる御仏の心なのかも知れません。
平成数度の大災害に、各寺院・青年僧侶さんが迅速な救護活動に奔走し、供養から復興へ希望と願いを込めて。心ひとつに。梅花の応援も篤かったと知りました。
さわやかでいて、優しく、穏やかな曲に追慕し、涙しながら宗務所に一人車を走らせた日もありました。
まだまだ途上です。
梅花を通して、同行に感謝し、自身の心が何かを拾える時まで……。
『心ひとつに、祈りの梅花』を。

時にユーモアも交えて

昼食の様子

梅花のふるさと

～詠讃歌の生まれた風景〈その二十三　花供養御詠歌〉

ひたすらな坐禅の心華（げ）をみ仏（しん）へ

花供養御詠歌

この心あまつ空にも花供ふ
三世の仏に奉らばや

道元禅師御詠歌

梅花流詠讃歌の中に「花供養御和讃」（山上曹源作詞）と「花供養御詠歌」（道元禅師御詠歌）があります。この二つは寺院法要の際、仏前にお供えものをする場合などにお唱えすることが多いでしょう。「花供養御和讃」の一節にある「色とりどりの花々を捧げまつらんみ仏に」の歌詞のように、たしかに梅花流の詠讃歌としては仏前にお花を捧げる意味を持つものです。

その一方で、もともと道元禅師が詠まれた和歌は、古くから坐禅の心境を詠んだ歌として曹洞宗では伝えられてきました。お花を捧げるということと坐禅とどう結びつくのか、ちょっと不思議な感じがします。そこで今回はこの御詠歌が「坐禅の心を詠んだ歌」として伝えられてきたことを考えてみましょう。

◇坐禅のこころ◇

この御詠歌はちょっと変わっていて、歌の最初に「この心」とあります。前後の脈絡なく「この心」と言われてもすぐには何の心のことかわかりかねます。これを曹洞宗では伝統的に「坐禅の心」と解釈してきました。

昭和期に「宿無し興道」と呼ばれ、生涯を坐禅一筋に生きぬいた清僧として有名な沢木興道老師がいます。その沢木老師が道元禅師のこの和歌を採りあげ解説している文章があります。

これは『大般若経』の理趣分に「一切の総持等持を修行すれば、諸の如来に於て広く供養を説く」と。つまり諸仏如来を供養するのに、坐禅の三昧が一番供養になる。それはそうじゃ。われわれが仏さんに団子を供えたって、功徳があるかないかわけがわからん。飯をよそうてプンプン句をさすと、功徳があるというのはおかしい。仏法に一番功徳があるのはなんであるかといへば、それは坐禅である。「弁道話」の中には、もし人、一時でも坐禅をするならば「諸仏如来をしては、本地の法楽をまし覚道の荘厳をあらたにす」とある。だから「この心天つ空にも花そなふ、三世の仏に奉らばや」仏さんに花・香などを供養するより、なにを供養するより、一番功徳が多いということである。それで僧遍照の歌に「折はまた手掌にけがる枝ながら三世の仏にはなたてまつる」という歌がある。この意味をもじって、この心、すなわち坐禅の心、すなわち王三昧、天つ空にも花そなふ、三世の仏に奉らばや。三世諸仏にこの坐禅の心を供養したならば……。それゆえ坐禅はなんのためにするかというと、三世諸仏を供養するためにするのである。（沢木興道『傘松道詠講話』一九四〇年）

ここに見える沢木師の解釈は、師が独特に行なったものではなく、江戸期・明治期を通じて曹洞宗の中に伝えられてきた伝統的な理解の仕

沢木興道老師

方でした。沢木師が引用している『大般若経』や『弁道話』の文章、僧遍照の和歌はいずれもそれ以前よりこの歌を解釈する際に引用されてきたものでした。

もう一人、愛媛県瑞應寺の住職で大本山永平寺の後堂職も勤めた楢崎一光師によるこの歌の解説も見てみましょう。

仏様にこんな綺麗なお花をお供えしたいものだ、と坐禅の心の花を讃えてあるのです。花のような心、心華、心の華です。この心というのは坐禅の心、三昧ですね。

坐禅の功徳のところに、「諸仏如来をしては本地の法楽をまし、覚道の荘厳をあらたにす」（弁道話の巻）と讃えてあります。私どもは法要が行われる時、よく坐禅をするのです。例えば、お涅槃が来ると涅槃摂心をしてご供養する、仏祖への報恩供養も、ご先祖のご供養も一番よいのは坐禅です。

仏様へこの心の華を捧げることは、すばらしいことです。華も香りがある。生きた華は最高によいのです。仏様のお供えを香華燈燭といいますが、お香やともしびやお華を差し上げる、これはみな仏様のご供養ですが、その一番根本になるのは心をこめたお供えです。その心が乱れていたら、いくらよいものを差し上げても仏様は喜んでくださらない。心のこもったもの、そういう意味では坐禅が一番よろしいわけです。（楢崎一光『はしふるつゆ』一九八六年　※引用者により抄出）

楢崎一光老師

このように沢木師・楢崎師の例に見る通り、近現代を代表する禅僧の例では、「この心」を坐禅の心と捉えて、これを仏に供養するという説明がなされていました。それでは道元禅師御自身にこうしたお考えがあったのでしょうか。

◇ 道元禅師の坐禅観 ◇

それを知るために道元禅師が興聖寺や永平寺において、修行僧たちに説法した記録『永平広録』中の一段（巻七・五二二上堂）をみてみましょう。そこにはまず道元禅師がご本師・如浄禅師の次の言葉を引いています。

「衲僧打坐の正に恁麼の時、乃ちよく尽十方世界の諸仏諸祖を供養す。悉く香華・燈明・珍宝・妙衣・種種の具をもって恭敬供養すること間断なし」（意訳：私が坐禅に打ち込んでいるまさにその時、あまねき世界の諸仏諸祖への供養となるのだ。あらゆる香華・燈明・珍宝・妙衣・種種の具をもって仏祖を恭敬供養すること少しのいとまもない）

これに続いて道元禅師は次のように言います。

「衲僧打坐の時節、磨磚打車は道うまでもなく、十方の仏祖に、妙衣・珍宝・香華を供養す」（意訳：私が坐禅に打ち込んでいる時、瓦を磨き車を打つという仏行であるのは言うまでもなく、あらゆる仏祖に妙衣・珍宝・香華を供養することである）

このように道元禅師は、打坐すなわちひたすらに坐禅に打ち込むことこそ、仏祖へ妙衣・珍宝・香華を供養することに他ならないと言っています。それは如浄禅師の坐禅の考え方を承け継いだものでした。坐禅することが仏祖への供養となるという考えをここに認めることできます。

これを踏まえると道元禅師によって詠まれた「この心」一首は、道元禅師の坐禅観、すなわち坐禅に徹することによって三世諸仏に供養するという趣旨と受けとめることができます。曹洞宗のこの和歌に対する伝統的な解釈はこの意味において正しいものと考えられます。

梅花流では、この道元禅師の和歌を「花供ふ」の語のあるところから「花供養御詠歌」として取り入れたのだと思います。そこには単にきれいなお花を供えましょうという意味にとどまらず、以上のような道元禅師の深い坐禅に対するお考えがあることを踏まえておきたいものです。

インド仏教遺跡～釈尊六大聖地巡拝の旅～ レポート

平成三十一年二月二十日から二月二十七日まで七泊八日の旅程で、「インド仏教遺跡～釈尊六大聖地巡拝の旅～」と銘打ち、秋田県曹洞宗青年会・会員十四名が乾季のインド国内を旅しました。その壮大な旅の一幕を猪股師範にレポートしていただきました。

鷲の高嶺にて

由利本荘市・永泉寺副住職
猪股尚典

平成三十一年二月二十日、秋田県曹洞宗青年会の有志十四名が、お釈迦様所縁のインドの大地に降り立ちました。二月の秋田は大雪の時期です。留守中の雪寄せや家族の心配、近隣のご寺院様にもご迷惑をおかけすることを申し訳なく思いながらも、この機を逃すわけにはいかず、巡礼の旅に申し込みました。

インドの人口は世界第二位で、どこに行っても多くの人で溢れかえっていました。ゴミが散らかる街並み、ハエの群がる屋台、交通規則の無い道路、深緑に濁ったガンジス川で人々はこれを神の川と讃えて沐浴されている姿を見て、インドのカオス（混沌）を身をもって感じました。人々の生活も混沌としており、カースト制度は根強く残り、生まれの差別、男女の差別、幼い子供たちが労働し物乞いをしなければならない社会、苦しみと喜びがごちゃまぜになった人間の本質が詰まっているこの地で、苦しむ人々を救う仏様の教え「仏教」が生まれたのだと、身をもって感じました。

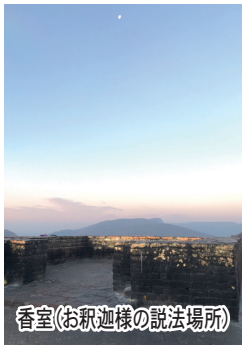
さて、今回は仏教六大聖地を巡礼する旅でしたが、その一つに梅花に親しむ者に特に縁のある霊鷲山がありました。ここはお釈迦様が弟子たちによく説法された山であり、お経にも登場します。今回参加者の半数以上が梅花の経験者という事もあり、霊鷲山で「大聖釈迦牟尼如来讃迎御詠歌（高嶺）」を奉詠する事を一つの目的にしておりました。

霊鷲山はあまり木々の生えていないゴツゴツとした岩山でした。その頂上付近に鷲の形をした岩がありこの山の名前の由来となっています。今回は山頂で朝日が昇るのを拝むため、早朝六時前に登頂が始まりました。参道の入り口から頂上まで約一キロ、高低差一五〇メートルの道のりを三十分ほどかけて登りました。朝は涼しく、二千五百年前お釈迦様も登られた道を一歩一歩踏みしめながら登りました。

鷲形の岩山

山頂には、すでにスリランカやタイの僧侶数名が瞑想に来られていましたが、混雑することなくゆっくりとお参りすることができました。山頂の一画にお釈迦様が坐って説法されたといわれるレンガで囲まれた香室があり、その中に入らせていただき一同礼拝読経し、いよいよ高嶺の奉詠が始まりました。

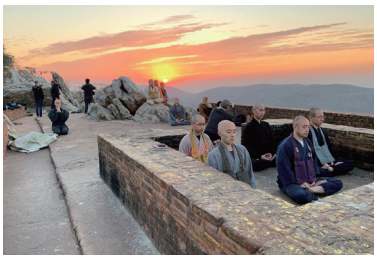
今もなお鷲の高嶺に月ぞすむ
人は入佐の山とおもえど



香室（お釈迦様の説法場所）

奉詠のあと、山頂から見えるインドの大自然を見ながら皆で坐禅をしました。その時に聞こえた鳥のさえずりはとても優しく、お釈迦様の声にも歌にも聞こえました。お釈迦様の教えは月の光に例えられ、時空を超えて静かに私達を優しく照らしてくださいます。その光にいつも私たちは照らされているはずなのに、なかなか現実の忙しさが邪魔をして気付かずに生活しています。間違いなく霊鷲山にはお釈迦様がいらっしゃいました。私達が信じて求めれば、どこにもお釈迦様の声を聞くことができます。詠讃歌にはその力があるのではないでしょうか。二千五百年の時を超えてお釈迦様に会えた感動に、自然と涙がこぼれてきました。

青年会有志14名



坐禅中（荘厳です…）

平成の時代もいよいよ幕を閉じようとする平成三十一年四月二十五日、「秋田県梅花講の歌」作曲者・佐藤公一郎氏がお亡くなりになりました。生前親交の深かった柴田和明さんより佐藤氏への追悼文を寄稿いただきましたので紹介いたします。佐藤氏の多大なご功労に感謝し哀悼の意を表します。

追悼

佐藤公一郎さんを偲んで

秋田市・東泉寺副住職　柴田和明

佐藤公一郎 氏

佐藤公一郎さんとの出会いは遡ること二十年前、彼が大学の研修でカナダに住んでいらした時でした。共通の知り合いのプロスキーヤーから紹介され、ちょうど私もカナダに滞在していたため（とはいえ六〇〇㎞も離れていましたが）、ご自宅にお招きいただいたのがきっかけです。

お会いした日は気温マイナス二十六℃にも関わらず、庭にあるホットタブ（露天風呂）に浸かり夜十時頃から翌朝五時過ぎまでお話ししたことを懐かしく思い出されます。以来、スキーを通じて公私ともに家族ぐるみのお付き合いをして参りました。

田沢湖スキー場にて
右（佐藤公一郎さん）
中（シェーン・ザックスさん）
左（柴田和明さん）

ある時「秋田県梅花講の歌」の作曲者を探していると聞き、お願いしたところ快く引き受けてくださいました。制作過程では、プロのオペラ歌手が歌い録音したデモをいただき、師匠（柴田弘一正伝師範）が梅花の「ヨナ抜き音」でとリクエストして、再度作っていただきました。

思い出は尽きませんが、生前のご功績を偲び、衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

〈佐藤公一郎氏　プロフィール〉

昭和二十六（一九五一）年九月二十一日東京生まれ

趣味／スキー、ゴルフ、旅行、グルメ

性格／明るくて社交的、教え子から慕われ人望があった、自分の信念を貫く（奥様談）

経歴／作曲家・末吉保雄氏に師事、桐朋学園大学卒業、桐朋学園音楽学部准教授、こどものための音楽教室の部長、二〇〇〇～二〇〇二年・カナダBC州ケロウナにて研修、二〇〇五年七月・ウィーンにて個展開催、毎年OTOの会演奏会に出品ピアノ、ヴァイオリン、チェロ、クラリネットなどアンサンブルを多数作曲

佐藤氏を偲び、今改めて「おらほの県の歌」に親しんでみては如何でしょうか

秋田県梅花講の歌

(一)山はみなもと　朝やけの　天をつく杉　湧く清水
供えまつらん　みほとけに　香華ふくいく　詠衆つどいぬ

(二)大地ゆたかに　稲の穂は　雨風を経て　いのち満つ
学びおさめん　み教えを　喜び鈴に　鉦にたくして

(三)千古かわらぬ　日本海　入り日に波は　慈悲の色
共に励まし　やわらぎて　梅花の道を　永久にいそしむ

秋田県梅花講の歌

明るくおおらかに　○△○△

拍速七六位

(一)(頭)やまはみなもと　あさやけの
(二)だいちゆたかに　いねのほは
(三)せんこかわらぬ　にほんかい

てんをつくすぎ　わくしみず
あめかぜをへて　いのちみつ
いりひになみは　じひのいろ

そなえまつらん　みほとけに
まなびおさめん　みおしえを
ともにはげまし　やわらぎて

こうーげふくいく　えいしゅつどいぬ
よろこびれいに　しょうーにたくして
ばいかのみちを　とわにいそしむ

※作詞は亀谷健樹老師（北秋田市・太平寺東堂）

梅花インフォメーション

令和元年度　梅花流秋田県奉詠大会

・期　日　十月二日（水）
・会　場　『男鹿市民文化会館』
　男鹿市船川港船川字海岸通り二号十四ノ五
　☎〇一八五―二三―二二五一
・時　間　開場／受付…午前九時
　開　　会…午前十時三十分
　終　　了…午後三時（予定）
・参加費　二、〇〇〇円

☞梅花流の御詠歌に触れるまたとない機会ですので、興味を持っている方がそばにおりましたらお誘い合わせの上、ぜひご来場ください。
　法具や教典、梅花流関連用品を取り揃えた出店もございます。

令和元年度　梅花流宗務所検定会

◆県北地区
・期日　九月五日（木・友引）午前九時集合
・会場　大館市『北秋くらぶ』
◆中央・県南地区
・期日　十一月七日（木・友引）午前九時集合
・会場　秋田市『さとみ温泉』
※両会場とも、四級師範・三級詠範・二級教範まで受験可能です

☞検定、緊張しますよね。でも、これも上達へのひとつの手段。課題曲が発表されたら、目標を定めて前進あるのみ。県内師範・詠範みんなが応援していますよ！

表紙の写真について

掛け軸は、編集者自坊所蔵の多田等観直筆の書

　中国は明代の書物『菜根譚』に依拠した言葉で、「活動（目まぐるしい、落ち着かない、忙しい等）の中でも心の静けさを保つことこそが、真の静けさの境地である」という意味です。聴衆を前にしてお唱えする時、どうしても心拍数が上がりますよね。そんな時はこの言葉を心の片隅に留めておいてほしい。詠道精進のその先に、心の静けさの境地が待っているかもしれません。

※多田等観さんは、明治二十三（一八九〇）年生まれ、秋田市土崎出身の浄土真宗本願寺派の僧侶です。縁あって十年以上チベット・ラサの僧院に滞在し修行を積み、ダライ・ラマ十三世とも親しく交流した人物です。帰国に際し多数の教典を持ち帰り、チベット研究に多大なる功績を残しました。若い頃、来日したチベット人に日本語を教えたものの、それは立派な秋田弁で、周囲の人をおおいに困らせたという愉快なエピソードは有名です。

☆多田等観関連の資料準備に際して、岩手県・花巻市博物館主任学芸員の小田桐睦弥さんには大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

編集後記

　平成が終わりを告げ令和の幕が開けた五月も下旬、秋田県梅花流機関誌『同行』の編集を、前任者の亀谷隆道師（北秋田市・太平寺）から引き継いだ。何気なく受け取った創刊号（平成元年十一月一日発行）から順番に綴られたグレーのファイルには、そのまま秋田県梅花流の歴史が記されていた。同時に、歴代編集者の方々の苦労と工夫もページをめくる度にヒシヒシと伝わってきた。この場を借りて労いと感謝の言葉を贈らせていただきたい。本当にお疲れさまでした。
　さて、私の手に渡った広報部の仕事。過去を偲びいつまでもしみじみとしているわけにもいかない。何せ原則年二回の発行が控えているのだ。第十号（平成七年）の発行部数は約四千三百部とある。対して、最新号は二千八百部の印刷となる。年々購読者や県内檀信徒講員さんの数は減る一方。しかし、御詠歌に懸命に取り組む若い師範や詠範さんは確実に増えているのも事実だ。この機関誌が梅花の奥深い世界に触れるひとつの入り口となり、また、読者のささやかな楽しみや詠唱の支えになればうれしい。
　そして、今回から心機一転、思いきって初の全カラー印刷。梅花に携わるすべての方々と共に充実した誌面を作っていけたらと思う。（俊彦）

お詫びと訂正

　第四十四号の六ページ目に誤りがございました。佐藤道機老師追悼文の三段目、[七万円]となっていますが、正しくは[七十万円]となります。関係者の皆様に対し、謹んでお詫び申し上げます。